

高齢化社会をよくする 女性の会会報

No.52

1991年10月発行

高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL.03-3356-3564
FAX.03-3355-6427



— 目 次 —

第十回シンポジウムを終えて	1
女性地方議員へのアンケート結果・抜粋	2~3
前夜祭報告	4
第一部報告	5~8
第二部報告	9~11
第十回シンポに参加して・アンケート	12~14
男・老いを語る② 古瀬 敏	15
ご寄付の御礼・本の紹介・事務局だより	16

第十回シンポジウムを終えて・お礼のごあいさつ
当会の活動の意義のいよいよの
拡がりと深まりを確認しえて！

代表 樋口 恵子

千五百人の虎ノ門ホールを埋め尽くした参加者、ほんとは通路に腰かけていた方もあったのです。壇上のことば、せりふ、しぐさに一つ一つ返ってくる反応の素早さ、確かさ。壇の上で胸の底からの思いを語りかける人々、ドラマで熱演名演をくりひろげる人々、舞台裏を支える人々、そしてこのシンポジウムのもう一つの主役は、ここに集まった人々だ、というのを深く感じた一日でした。北から南からの会員だけで約六〇〇人と聞くと、この一体感、そして波紋のひろがる手ごたえは当然のことかもしれません。

チルチル爺、ミチル婆として名案内役をつとめて下さった永六輔、秋山ちえ子両先生は、当日ばかりでなく、この企画をラジオ番組などを通してPRして下さいました。朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、NHK、テレビ朝日など、マスメディ

アにも数多く取り上げられ、当会の活動の意義がいよいよ拡がり深まりを示したことは心強い限りです。地方政治と女性議員のかかわりは、今回全国初のアンケートで実像が明らかになりました。高齢化社会を豊かに生きたい、人間らしく老いたいと願う女性、男性にとつて、このシンポジウムが確実な位置を占めています。来年は仙台で東北六県、新潟、北海道の仲間たちがすでに活動を開始しています。

今回のシンポジウムをきっかけに、女性地方議員と共に学ぶ高齢社会と行政に関するセミナーを企画してはどうか、の声が出ています。また「老いの青い鳥」は有馬孝子様のご厚意によりビデオができて、貸出しも考えています。大きな課題と広がりを一しよにつくって下さった皆様にあらためて御礼申し上げます。

*****★女性地方議員の介護体験と高齢化政策に関するアンケート結果・抜粋*****

実施年	一九九一年七月
調査方法	郵送法
発送数	一三三五通
回収数	五六九通
回収率	四二・六%

2 あなたご自身のご家族と介護体験についておうかがいします。

問5 配偶者関係 N||五六九

1 未婚 五・三%

2 死別 七・六%

3 離別 五・一%

4 有配偶 八一・二%

問7 これまでに、お年寄りの介護経験はありますか N||五六九

1 現在介護中 八・一%

2 過去に介護した 四八・九%

3 現在はないがこれから可能性あり 四二・五%

それはどなたですか。いくつでも○をつけてください n||三二五

1 夫の父 二二・五%

2 夫の母 三六・六%

3 自分の父 二五・五%

4 自分の母 三二・九%

5 夫 六・二%

問10 そのときの介護の程度 n||三二五

1 自分だけが介護 一九・七%

2 自分を中心で他の家族が手伝う 三二・九%

3 他の家族が中心で自分が手伝う 三二・三%

4 その他 一一・四%

問11 介護の中でいちばんつらかったこと(○印は一つのみ) n||三二五

1 経済的負担 五・二%

2 身体的疲労・病気 二三・四%

3 精神的なストレス 二七・七%

4 家族の協力が無い 〇・三%

5 親族や周囲の無理解・人間関係のトラブル 七・一%

6 仕事や社会参加と両立できない 二二・八%

7 介護の知識や方法を知らなかったこと 五・二%

8 その他 七・四%

問12 家族以外のサービスを利用しましたか。いくつでも○をつけて下さい n||三二五

1 なし 四九・五%

2 家政婦 二三・四%

3 ホームヘルパー 三・四%

4 訪問看護婦 三・一%

5 ボランティア 一・二%

6 入浴サービス 三・四%

7 デイ・ケア 〇・九%

8 ショート・ステイ 二・五%

9 給食サービス 〇・六%

10 介護教室 一・二%

11 その他 九・五%

問13 今後、老人介護をしなければならぬとしたら、議員活動(他の職業活動)を続けられると思いますか N||五六九

1 思う 九・七%

2 むしろかしいが何としても仕事は続けたい 六七・〇%

3 親の介護のためなら辞めてもよい 一・八%

4 その他 一〇・〇%

問14 老人介護と議員生活の両立のために、何が必要だと思いますか N||五六九

1 ヘルパーや訪問看護婦がひんぱんに来てくれる 四九・〇%

2 近くに特養ホームがある 二五・八%

3 老人病院の充実 二三・九%

4 往診してくれる医者がある 一七・八%

5 近くにデイケア・センターがあること 三〇・四%

6 家族の理解や協力があること 三五・九%

7 その他 四・七%

3 これからの議員活動と高齢化社会についておうかがいします。

問15 あなたは選挙活動の中で高齢化対策を主たる政策の一つに掲げられましたか N||五六九

1 はい 八八・〇%

2 いいえ 四・六%

*****★女性地方議員の介護体験と高齢化政策に関するアンケート結果・抜粋*****

↓「はい」と答えた方に、高齢化社会対策として、特に何を提言されましたか。いくつでも○をつけて下さい
n＝五〇一

- 1 年金の充実 一九・〇%
- 2 雇用機会の確保 一六・二%
- 3 要介護老人のための施設の充実 七四・一%
- 4 要介護老人のための在宅福祉の充実 七九・四%
- 5 学習・社会参加機会の拡充 二四・〇%
- 6 ケア付住宅の建設 三六・三%
- 7 介護手当制度の創設ないし拡充 三七・三%
- 8 情報システムの確立 一七・四%
- 9 老人病院、往診など医療の充実 三七・五%
- 10 その他 二五・〇%
- 17 問 17 これからあなたの地域で最も力を入れたいと思われる老人福祉サービスは何ですか(三つまで) N＝五六九
1 三世代(四世代)同居できる住宅建設 四・七%
- 2 高齢者向けケア付住宅 二五・三%
- 3 昼間預かるデイセンター 二七・六%
- 4 昼間預かるリハビリセンター 五・六%
- 5 夜間預かるナイトケア 四・四%

- 6 入浴サービス(巡回)、(通所) 七・六%
- 7 給食サービス(配達) 一九・三%
- 8 給食サービス(送迎つき会食) 二・八%
- 9 ショートステイ(短期入所) 一五・三%
- 10 外出のための送迎サービス 二・八%
- 11 ホームヘルパー制度の充実 四八・九%
- 12 住民参加型ヘルパーの充実 一四・八%
- 13 ホランティアの養成 八・一%
- 14 介護研修の充実 二・六%
- 15 訪問看護の充実 一四・二%
- 16 痴呆性老人のための政策 二五・八%
- 17 若年要介護者のための政策 四・四%
- 18 高齢者に住みやすい都市計画 二八・一%
- 19 一人ぐらし高齢者の介護ネットワーク 一六・七%
- 20 元気に老いるための生涯学習の充実 一〇・五%
- 21 子どものための福祉教育 七・〇%
- 22 いつまでも働ける場の創設 七・〇%
- 23 その他 三・二%
- 4 あなた自身の老いについておうかが

いします。

問 19 もし自分が要介護状況になったらと
き、主として、どこで(だれに)介護してもらいたいと思いますか N＝五六九

- 1 自宅で配偶者 一六・三%
- 2 自宅で息子 一・四%
- 3 自宅で娘 八・三%
- 4 自宅で嫁 四・二%
- 5 自宅でホームヘルパー 二一・一%
- 6 自宅で訪問看護婦 一〇・〇%
- 7 自宅で家政婦 三・三%
- 8 自宅でホランティア 二・六%
- 9 有料老人ホーム 五・三%
- 10 ケア付住宅 一七・九%
- 11 特別養護老人ホーム 一六・三%
- 12 老人保健施設 七・四%
- 13 老人病院 四・〇%
- 14 その他 二・八%
- 問 20 介護に子どもは頼れるか N＝五六九
1 頼れる 一四・四%
- 2 そう思わない 四七・一%
- 3 分からない 二八・一%
- 問 21 よい施設、手厚い介護の費用負担は? N＝五六九
1 国の福祉サービス充実のため税金が増えてもよい 四七・六%
- 2 個人で老後対策をたてる 一〇・九%
- 3 その他 三八・一%

一九九一年九月一日(日)

第十回シンポジウム前夜祭

第十回シンポジウムに参加される会員の

懇親と交流会を兼ねて前夜祭が開かれました。会場の国立教育会館一階・レストラン「カトレヤ」で五時に受付開始。

明日のシンポジウムをめざし、前日から、上京された会員たち、そして出演くださる地方議員の方達、関係者、など一五〇人の参加者で会場はアツという間に埋めつくされました。(会場も狭く、お料理も不手際があつたこと、お許し下さい)

司会の林理事の開会あいさつのあと、つづいて、長年の会員であり、石川県金沢市から来られた、梶井幸代さんの祝辞。いつまでも若々しく、力強い言葉で後輩を励まし、地方にあつてこの会と共にある姿勢は、当会にこの人ありの感を深めたものでした。

次に、『寸劇シンポジウム―老いの青い鳥―はどこに?』の出演者であり、主役の一人である、秋山ちえ子さんに乾杯

の音頭をとっていただきました。

そのときのごあいさつの中に、「この会ではいつも、陰の人として私はお手伝いをしていたにもかかわらず、今回は、舞台に上ることになり戸惑っています。この前夜祭で、女性たちのエネルギーをまたあたりらみて、これは新しい政党にもなりうるのではないか……」と率直な驚きを表わされたことが印象的でした。

北は北海道から南は沖縄まで、日本を縦断する会員の集まりは、確かに、このエネルギーの底深さを感じさせるものがあります。年一回のシンポジウムや会報で知り合った懐かしい会員同士の情報交換やその活動のようすを話し合う歓談とパーティに入りました。

その後、遠来のグループ会員の紹介とスピーチをお願いしました。

仙台、新潟、盛岡、長野、福島、京都、島根、熊本、北九州など、遠路はるばる

グループで参加くださった方々の熱意あふるるスピーチは、拍手、拍手の連続。

引きつづき樋口代表から、明日のシンポに向けてのあいさつがありました。

「とうとう十年目を迎えました。グループ会員も十一から始まって今や一〇〇グループに達しようとしています。女性たちが地域で自分たちにふさわしい老いの基盤を作り始めました。地方選で増えた女性議員を混じえ、地域を変えるパッチワーク作戦を展開し、結果的に日本全体どこでも老いやすい社会にしましょう。保健と福祉と医療の三本立にした明日の舞台におしめない拍手を！」という言葉で結ばれました。

このあと特別出演の大熊一夫氏から、イタリア民謡オ・ソレミヨを会場を揺るがすバリトンで披露してもらいました。

(神馬由貴子記)

女たちは老いの地図を塗り変える

コーディネーター 樋口 恵子

インタビュアー

芹沢茂登子

レポーター

沖藤 典子

中村 雪江

袖井 孝子

望月 幸代

井上みゆき

本年四月の統一地方選挙で選出された女性議員に対するアンケート調査の結果を手がかりに、文字通り北は北海道から南は沖縄まで二十二人の女性議員が舞台にそろい、自らの介護体験や高齢化問題へのとり組みを語り合った。

出演者は、山口ゆき子（北海道広島町）・

浦川陽子（岩手県盛岡市）・中嶋里美（埼

玉県所沢市）・桑山静子（埼玉県川越市）・

三井マリ子（東京都）・富沢由子（東京

都杉並区）・渡辺久美子（東京都豊島区）・

土井節子（東京都田無市）・木村のり子

（東京都港区）・加藤巴江（神奈川県小

田原市）・有安八重子（神奈川県逗子市）・

宮沢栄子（山梨県）・石川美和子（長野

県上田市）・松川キヌヨ（新潟県長岡市）・

内田洵子（新潟県新潟市）・森下茂子（愛

知県渥美町）・正村満理子（滋賀県彦根

市）・八島フジエ（京都府城陽市）・中

村幸子（島根県匹見町）・森田益子（高

知県）・福田淑江（福岡県北九州市）・

玉城文子（沖縄県豊見城村）。一期目が十

四人、二期目以上が八人で、大部分が会

員である。

まずセッションAでは、沖藤・袖井が

調査結果を報告し、それに関連して自ら

の体験を話してもらった。調査によると

「現在介護中」と「過去に介護した」を

合わせると半数を超え、これに「これから可能性あり」を加えると九割にのぼる。

介護と議員活動との両立については、議員

活動活動を「続けられると思う」は一割足



らず、「むずかしいが何とかして続けたい」が約三分の二、そして「介護のためなら辞めてもよい」が一・八%であった。

壇上の議員のうちには、親や夫の介護体験のある人が少なくない。福田氏は二

期目の選挙に出ようとする時に、夫が心筋梗塞で倒れたため、選挙中大変に苦労している。調査によると、家族以外の公的サービスを利用した人はごく少数。山口氏も、母親が倒れた時には付き添いを頼んだという。

調査によると、選挙活動の中で高齢化対策を主な政策にあげた人は九割弱。今後、自分の地域で最も力をいれていきたい老人福祉サービスとして、都市ではケア付住宅を、町村では入浴サービスや高齢者の介護ネットワーク作りをあげる人が相対的に多かった。

人口が七千人から二千人に減少し、高齢化率三〇%、世帯の半数が高齢者世帯という島根県見町選出の中村氏は、六年間夫の親を介護した体験を踏まえて、「住みなれた地域で老いて死を迎えるために、多機能施設を作りたい」と語った。また、高齢化率一四・六%の盛岡市選出の浦川氏は「市には入浴車が二百しかないため、希望者は一か月に一度しか入れない。民間業者に頼めば一回一万五千円かかり、お金のある人しかサービスを受けられない

い」と訴えた。

雪国の北海道広島町選出の山口氏は、「除雪車が通った後、玄関の前に雪が積み上げられて、お年寄りには外に出られない。除雪車の方向を一寸変えれば可能だが、やろうとしない。男性には弱者に対する思いやりがない」と語った。

人口流出による高齢化の進行は、大都市でも著しい。港区議の木村氏は、「地価高騰のために老人の住宅問題を深刻にしている。高齢者サービス付住宅をやつと十九戸実現させた」と報告した。また、豊島区議の渡辺氏は、対象人口が増えているにもかかわらず、十六年間ヘルパーの増員がないことを訴える。

セッションBでは、「私はこうして議員になった」「私たちの地域で何が問題か」「こうすれば老人の地図が塗り変えられる」等についてフリートークが行われた。選出のいきさつについてみると、全議員中女性は一人、あるいは何十年ぶりに初めて誕生した女性議員という人が多く、政治の場への女性の進出がいかに難しいかを示している。小田原市議・四期目の



加藤氏は、未だにただ一人の女性議員。宮沢氏は、山梨県政史上初の女性議員。また渥美町議の森下氏は三十六年ぶり、上田市議の石川氏は二十六年ぶりの女性議員。「夫にも、周囲にも反対された」（松川氏）、「選挙に出る位ならパートに出た方がよいといわれた」（桑山氏）のように周囲の協力があまり得られなかった人もいるが、森田氏のように市議県議合わせ六回の選挙を、ほとんど一銭も使わず

に済ませた人もいる。

選出されてみて驚いたのは、「議会が男性中心である」(宮沢氏)、「男は、ハードにばかり目を向ける」(玉城氏)、「高齢化問題が、議会でとりあげられることは大変少ない」(石川氏)の指摘があり、女性ももっと政治の場に進出すべきであるというのが大多数の意見であった。

他方、「役所に行けば情報を提供してくれるので、情報公開に力を入れたい」(八島氏)、「女性の強さを行政は無視できない」(内田氏)等、女性議員としてのメリックも強調された。

地域がかかえる問題としては、高齢化問題に加えて「農家の後継者の嫁不足」(森下氏)の訴えがあった。既存のサービスの不満を自らの力で解決した人もあり、「人口二十万人にホームヘルパーはたった八人。これでは対処できないので、仲間とホームヘルパー協会を作った」(加藤氏)、「妹が介護に疲れ、老人を特別養護老人ホームに入れたがつっているが、本人や周囲が納得しない。そこで特養への体験入所事業(おためし入居)を始めた。また、

全国で初めて夜間老人をあずかるナイトケアを始めたが、夜あずけて朝迎えに行くことは大変にむずかしく利用者は少ない」(松川氏)という例もある。

今後実施させていきたいこととしては、「女が無償でしている家事・育児・介護の総点検と性別役割分業の撤廃」(三井氏)、「社会福祉協議会の体質改善」(宮沢氏)、「あらゆる公共施設にエレベーターを」(中嶋氏)、「小学校の空教室を老人のために使い、公教育に風穴を開けたい」(八島氏)、「老若男女がつどえる生きがいセンターをつくりたい」(桑山氏)、「中学校区に福祉の拠点を置きたい」(正村氏)、「クアハウスのある生涯学習センターをつくりたい」(森下氏)、「医療・福祉のネットワークづくり」(内田氏)、「市民参加の福祉プラン」(有安氏)などがあげられた。

国に対する要望としては、「平成二年度で約四兆円といわれる消費税を福祉に使えるはず」(山口氏)、「人口七万の市にフルタイムのヘルパーは二人しかいないため有償ボランティアに依存しているが、時

給が低く、労働時間が短いためにとうてい生活できる収入は得られない。国はヘルパー増員をいかにして実現するのか」(土井氏)、「老人保険法の改正には反対である」(中嶋氏)などがあげられた。

会場からは、「ボランティア依存の福祉への反対。介護は国の制度にすべきだ」「人の世話になるより、まず健康づくり」「有償ボランティアの解消」などの声に加えて、「男性議員は皆さん、おしきせて物を



言う。女性議員に粉砕してほしい」「女性議員に予算をしっかりと見てほしい」「まず身近な男性である連れ合いを変えていくことが必要だ」など、女性議員および女性全般への要望があげられた。

これに対して議員の側からは、「国を変えるためには女性を中心になって動かなければならぬ」「女性の議員を増やし、地方から変えてゆきたい」「やればなんでもできる」「生活のレベルを見つめ、女性のネットワークを作りたい」「審議会にもつと女性を」などの意見が出された。

最後に樋口代表から、女性地方議員を対象として初めて実施された調査の意義と、地域や党派を超えて集まった二十二人の女性議員の話し合いへの感想が述べられた。

議員が介護に苦勞している実態に触れ、働いているために親を施設にあずけたことがストレスになっており、女性は在宅にせよ、施設にせよ大きなストレスを負っている。老いの地図を塗り変えるには、何よりも地域のタテ割り行政を解消しなければならぬ。それができるのが女性

議員である。ベルリンの壁もくずれたが、女性議員と女性たち、そして男性をも巻きこんで老いの地図を塗り変えてゆきたい。さらに女性地方議員たちのネットワークをつくり、それを基礎に、地域を、国を変えてゆきたい——という呼びかけで、長時間にわたるシンポジウムの幕をこじた。

* * *

九時半という早い開始時間にどれ程人が集まるか気がかりだったが、会場はほぼ一杯。三時間にわたる長丁場のため、途中でだれてしまうのではないかと思われたが、熱のこもった話し合いが行われたことは驚異でさえある。それだけ、地域における高齢化対策をより良いものにしていくことに対する人びとの関心が深く、女性議員の活動への期待が高いといつてよいだろう。

アンケート調査の自由回答や、壇上からの発言を通して感じられるのは、女性議員の真面目さと熱意、そして高齢化問題に取り組む姿勢の真剣さである。党派を超えて、現在の日本の医療福祉制度の



在り方に疑問が出されている。国会議員であったなら、おそらくもっと党派にしばられたタテマエ的な答えが出てきたであろう。地方から、そして女性の手によって、確実に日本は変わっていくような予感がする。

(袖井 孝子記)

■ 第二部 ■

寸劇シンポジウム

老いの「青い鳥」はどこに？



原作・メーテルリンク 廣作・樋口恵子 スライド提供・岡本祐三(阪南中央病院内科医長)
出演者 チルチル爺・永六輔 ミチル婆・秋山ちえ子 特別出演・大熊一夫
証言と提言 看護婦・吉田和子/ソーシャルワーカー・中村雪江/老人病院長・天本宏/家政婦・大岩
教子/看護助手・西尾波子/特養ホーム施設長・桜井里二/同・有馬孝子/特養ホーム寮
母・安田敬子/訪問看護婦・加藤登志子/ホームヘルパー・井上千津子/同・市村芳乃/
ボランティア・白川すみ子/家族・中村和子

寸劇俳優(当会会員)

第五場・シンポジウム

渥美雅子/多田哲朗/中嶋里美/松村満美子/三井マリ子/沖藤典子/金谷千都子/神馬
由貴子/芹沢茂登子/袖井孝子/高見澤たか子/林慶子/藤久ミネ
厚生省老人福祉計画課長・中村秀一 厚生省老人保健課長・伊藤雅治
放送タレント・永六輔 評論家・秋山ちえ子 当会代表・樋口恵子

「青い鳥を見つけるための10の提言」 当会会員・出演者一同
進行・舞台監督 林慶子/金谷千都子/高見澤たか子/藤久ミネ
廣作協力(替え歌など) 大熊一夫

今年第十回目でもあり、なにか新しい
試みを、ということでの寸劇シンポジウ
ムが誕生しました。私たちが老いたとき、
どこで安心して人間らしく、尊厳を持って
暮らすことができるか、老いの「青い鳥」を
求めて、チルチル爺、ミチル婆が、あちこち
尋ねてまわるといふ設定。ドラマはすべて
実際の取材に基づいています。廣作者・樋
口恵子は、推敲を重ねて完成は上演の一週
間前、決定稿は前日というまさに苦心の結
晶です。

—— 第一場 ——

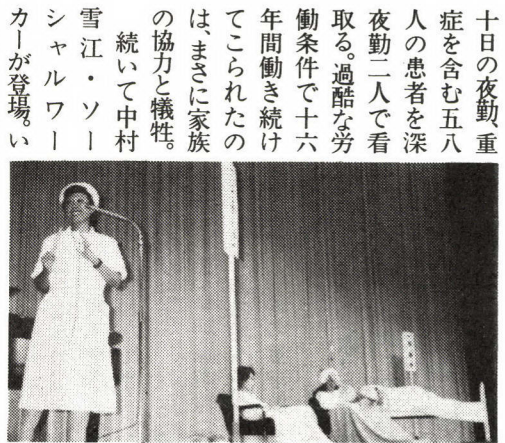
舞台には、高福祉で知られる北欧のよう

すがスライドで写し出される。訪問看護婦
やヘルパーに助けられ、在宅でゆったりと
生活している高齢者の姿を見ながら、チル
チル爺、ミチル婆は、老後の不安の大きい
日本はどうなのかとまず病院を訪ねてみ
る。

—— 第二場 ——

舞台は一般病院。ナース・ステーション
でブザーがいちどきに四つ鳴る。患者たち
からのてんでの訴えで、ナース(渥美はて
んでこ舞い。

こうした一般病院で、お年寄りを介護す
るほんものの吉田・看護婦登場。月に九



一般病院 ナースはてんでこ舞い

十日の夜勤重
症を含む五八
人の患者を深
夜勤二人で看
取る。過酷な勞
働条件で十六
年間働き続け
てこられたの
は、まさに家族
の協力と犠牲。
続いて中村
雪江・ソー
シャルワー
カーが登場。
まの医療制度では、お年寄りの入院が長引
くと、医学管理料が半年で半に減り、リハ
ビリの料金も安くなり、病院が経済的に成
り立たなくなるため、患者を早く追い出そ
うとする事情を説明。

ではその先はどうなるのか。なんとかし
て在宅へ。老人保健施設で自立できるまで
回復するのが理想だが、東京都を例にとる
とたった一つ、五千人の待機者がいる。そ
こで老人病院ということになるが、自己負
担が一月二十万かかるわりには介護の
サービスの悪いところが多い。

良心的と定評のある天本病院院長から
老人病院の問題点が指摘される。昭和二十

三年にできた医療法では、「病気を治すこと」にお金をかけても、患者の生活の質を高めることにはお金が支払われないしくみになっている。入浴設備、病室や廊下の空間的ゆとり、そして介護のマンパワーの絶対的不足。医療従事者にも週休二日制を確保できるようにして欲しいと強調。

続いて入院中のお年寄りの世話をする大岩・家政婦、西尾・看護助手から、眠る暇もないような厳しい労働条件でありながら、保障のない辛さや、せひ若い力を現場に欲しいという希望が述べられる。チルチル爺、ミチル婆は現在の老人病院は「現代版姥捨て山」と聞いてびつくり、「生活があつて明るい」という評判の特別養護老人ホームへ向かう。

第三場

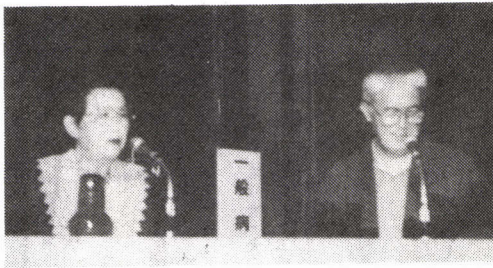
さくら苑・桜井園長は、まず職員数を現在の二倍にして欲しいこと、またプライバシーのまったくない設置基準、「措置」という言葉に象徴される日本の老人福祉の貧しさを指摘。

サンライフらくじゅ・有馬理事長は、高齢者が自立して暮らしたいという希望に応えるためヘルパーを導入、特養との併設で日本初のケアハウスをスタートさせた。ただし所得に応じて一か月六〜八万円の経費が必要、月収二十八万円の上限がある。

これからは女性も経済的自立をしないと、老齢年金四万円ではケアハウスにも入れないと、女性の立場から働き続けることを力説。

なぎさ音楽苑の安田・寮母は、若いすばらしい感性の寮母さんたちが慢性の肩こりや腰痛に悩まされながらも、一所懸命お年寄りの世話をしていることを報告。しかし「同じ目線の高さで接するように」と教育を受けても、現場では食事の介助も立っただまま、四人いちどきという有様。せつかくこの仕事に生きがいを見出している若い人たちさえ、職場から離れて行ってしまふ。行政の人たちも、ほんとうにお年寄りたちが何をいちばん望んでいるかを知って欲しいと説く。

再び桜井氏がチルチル爺、ミチル婆の質問に答えて登場、お年寄りが施設に入居したいと思ってもすべて申請主義で、手続き



チルチル爺とミチル婆の案内で……

が面倒。その上、たとえウェイティング・リストにのつたとしても、たとえば横浜を例にとると、希望する施設に入るには三年半待たなければならぬと説明。これを受けて、運よく施設に入れても、四人部屋、お仕着せの衣料や髪型、持ち物も段ボール箱二個に制限され歯ブラシまで全員共通、おならをする権利もないという状況を運営委員、事務局の面々が迷演。

第四場

病院もダメ老人ホームも満杯、では厚生省が進めている在宅は大丈夫だろうか。

舞台は父(多田)、母(高見澤)倒れて共に五年、それを四〇歳になるサラリーマンの息子(大熊)が働きながら看取っているというA家の例。父親が迫真の演技で、「なに、老人ホームに入れたと? 親不孝者!」と息子を怒鳴りつける。「嫁さえいれば……」と息子は嫁さがしに飛び出す。

すると突然、舞台暗転で介護嫁幽霊(梶谷)の登場。過労で倒れてあの世へ。介護の苦勞より辛かったのは、周囲の無理解。ピアノの弾き語りで、ほんとうは夫の協力が欲しかったのにと恨み節。その歌に連れられて、「模範嫁」として表彰されたばかりに、自分の病気の治療ができずに倒れた農家の嫁の幽霊(渥美)が出て来る。両人の本格的な演技に拍手が起る。

舞台は再び現実の世界へ。骨折で倒れた八五歳の妻は秋山ちえ子氏の特別出演。七九歳の夫(大熊)が福祉事務所や医院、ヘルパーなどいろいろ電話をしても助けてくれないのに絶望して、あわや無理心中というところへ、加藤・訪問看護婦、井上・市村・ホームヘルパー、白川・ボランティア、寝たきりの夫を介護している中村和子・家族が駆けつけて助ける。日本では訪問看護婦制度は、まさに始まったばかり。地域の医師会との協力体制が絶対必要。病院から続々と重症患者が返されてきて問題。

ホームヘルパーの現制度では、お年寄りの生活は支え切れない。増員はもちろん必要、養成学校の充実など、安心して働ける条件がない。長年勤めても感謝状一枚と三千円が貰えるだけの身分保障。

ボランティアは病院の送迎、給食、ケアつき住宅でのサービスなど多様な活動をしているが、ふと気が付いたら安上り福祉の下請けにならないように、行政へ呼びかける運動型のボランティアでありたい。

最後に脳梗塞で倒れた夫を看取る家族は、チューブ栄養、採尿が自宅のできるのも、近くの医師の往診があるからこそ。二四時間の介護はほんとうに辛い、厚生省のとなえるゴールド・プランはゴールド・プランではないかと訴える。

ミチル婆は、「地域でもっと年寄りの声を出すべきだ」としみじみ語りかける。そこへ老夫から、ふだんのゲンティに早変わりした大熊一夫氏がカルメンの闘牛士の替え歌で、けなげに「オレが看る行進曲」を高らかに歌い上げるが、疲れ果てて、ついに倒れる。

第五場

あそこもダメ。ここもダメ。チルチル爺、ミチル婆は、かと言って高い有料老人ホームにも手が出せず、ついに「厚生省さん」と呼びかけると、樋口代表が老人福祉計画課長(中村秀一氏)と共に登場。

舞台は一転してシンポジウム風。これまで見てきた問題点をお互いに話し合う。ミチルは、大人たちが高齢者に対してやさしさを示し、それを子どもたちに見せていくことも大切だと説く。ミチルは、「お先まつ暗」ときげんななめ。「ヘルパーの数が十六年間変わらない市や、住民七万人に二人」というところも何か所かある」と樋口代表も指摘。

これに対して中村氏は、「老人福祉の歴史は三十年、だが在宅福祉はようやく五年の経験。右手、左手が共に利き腕となるにはまだ時間がかかる。また全国三千三百の市町村でそれぞれ独自の福祉サービスが必要。ヘルパーもそのためにいまの三倍に

する。いますべての行政が転換期にあるが、実はいちばん変わっていないのは住民の福祉に対する偏見ではないか。住民の意識変革がなければ、サービスがあってもニーズがないということになる」と語る。これに対して、チルチル爺が「甘ったれんじやないぞ」という行政の態度が見え見えだと鋭く指摘。ミチル婆、樋口代表も「もっと福祉の供給が多くなり一般的になれば、そういう偏見も消えるはず」と反論。活発な討議のうちに終わりの時間を迎える。中村氏はタテ割り行政の厚い壁も、各市町村のいい実践から崩れていくのではないかと発言。「青い鳥」は人頼みではなく、自分たちの手で見つけるものだということを確認して、高齢化社会をよくする女性の会として「出前迅速 屋号は福祉」往診なければ在宅で死ぬぞ」「医師養成に老年科必修」「ついの住みかは個室が当然」など十の提言をプラカードで提示。最後は、チルチル爺・永六輔さんのすばらしい「高齢者木遣り」が披露され、ミチル婆・秋山ちえ子さんは「この集まりが各地にすてきなタネとなつて播かれるように」と感想を述べ、大喝采のうちに終幕。

(高見澤たか子記)

第十回シンポジウムに参加して 感想・提言

軍備予算を高齢化対策へ

いつもすばらしいシンポですが、今回も大いに笑いつつ、伝えるべきことは厚生省の役人に伝え、本当によかった。ただただ、樋口代表のユーモアとその底力に励まされ、感動の一日でした。

大熊氏の発言にもあったが、この会が政党にならないことに一つの大きな意義があるでしょう。日本は世界一の金持大国とか。軍備予算をけずり、高齢化にまわして下さい。

軍事力は自民の方針、これ以上許さず日本の超高齢化社会へその予算をまわすこと。特に社会党の女性議員に要求します。
〈70代〉

時間配分に気づき方がほしい

企画は大変よいが、あまりにも大勢の出演で一人一人の発言時間が短く、せっかくの意見がしりきれトシボに終わった。

もうすこし人数をしぼってほしい。また自らの当選の宣伝

をする議員は実に見苦しい。

在宅介護の問題点があまりにも多いと思うのでその問題点を取りあげてもらいたい。
〈60代〉

子どもをあずけて参加しました！

とても痛快。これだけ多くのがんばっている女性たちがいることに勇気づけられました。休暇をとっての当日参加でしたが、来てよかったです。
〈30代〉

多くの中から選びたい

介護・医療の問題は対象を分けて、

1 寝たきり老人、どうしても人の手が必要な方々の介護

2 自助努力ができる老人、プライドを尊重して自立できるシステム作り

3 訓練によって自立できる人の養成、(可能ならば他の人々の援助のできる訓練)

練)

だと思えます。ヘルパーやお金が不足ならば、地域のネットワーク作りがとりあ

えずの手だと思えます。

老人福祉といえは今日、国の施設か民間のシルバー産業か、二者択一の選択権しかありません。住民参加型のケアで、なるべく負担が一つのところにかたまらないようにする方法がないでしょうか。

北欧諸国の例をそのまま日本の風土にあわせても、根づかないと思います。
〈20代〉

老後を託せる子どもに育てよう

学校教育の中でもっと老人問題を取り上げるべきです。私たちの老後を託す、現在の子どもたちをみた時、本当に不安になります。

まず私たち母親がもっと子どもに老人との接し方を教えるべきだと思います。

とにかく三時間座りっぱなしは疲れました。途中、ほんの少しでよいですから、立ち上って背伸びをするくらいの余裕がほしかったです。
〈40代〉

女も男も半分ずつに

議員たちの、良心に基づいて行動して

いる明るさと力強さに接することができ
よかった。

ランチタイムに霞ヶ関ビル35Fから国
会議事堂、議員会館を眺め下ろした。議
事堂のいかめしいたたずまいに、一種の
オソレを感じた。エレベーターで降りて
地上に足をおろして初めて「ア、あそこ
で女たちも議論し、法を決めることを望
んでいたんだ」と思い至った。あそこの
席を女が半分占めたら、近辺のスペース
には乳母車があり、子どもたちが遊んで
いるかもしれないのだ。「肩をいからした
男たち」をあつ建物から追い出そう。

〈40代〉

国会議員も討論の場に

貴重な地域活動の報告もあり、参考にな
りました。冗談でなく本当に首相婦人
はじめ、国会議員の方々に介護の問題に
ついてのアンケートをしてもらいたい。

〈40代〉

ヘルパーの位置づけを明確に

寸劇は大変おもしろかったです。特に

“うれしい”のシーン。みなさん芸達者
ですね！

10万人のヘルパーさんといっても、ど
ういった就業形態の人たちを考えている
のでしょうか。きちんとした養成機関も
つくらず、採用資格として位置づけもせ
ず、またはりぼての行政になってしまっ
たのでしょうか。介護福祉士にしてもそう
です。資格、身分をきちんと確立すべき
です。

〈20代〉

消費税をしっかりと老人福祉に！

〈50代〉

女性のパワーに期待する

ボランティアを高校ないし大学生活に
義務づけて、それが評価につながるよう
にしたらよいと思うし、ぜひ労働条件の
改善を願う。

日本はすべてが明治以来の富国強兵政
策当時のままの、効率第一主義できてし
まったので、その弊害がすべてに悪影響
を与えてしまった。その結果が

今日の原因になっているのでそ

れをはっきり認識させるためにも、女性
が中心となってマスクミ等に働きかけて
ほしい。

〈30代〉

福祉の申請主義を変更してほしい

〈年齢不明〉

機械の導入にも力を入れて

介護道具・介護ロボット開発への研究
費の補助を大いにして、人手不足を解消
してほしい。とくに下の世話は誰がして
も大変なことなので、機械力が導入でき
れば、介護は一つの山をこえるものと思
う。

また病气、ねたきりになった時に入れ
る病院の確保を。自宅介護は、子どもた
ちの就職の機会が少ない地方では無理な
ことである。現に自分の周囲には夫婦だ
けの二人世帯がふえています。〈50代〉

訪問看護の充実と尊厳死への対応を

〈50代〉

第十回シンポジウムに参加して 感想・提言

老人福祉は 女性の手で

全国から女性議員集めて 「高齢化社会シンポジウム」

「女性福祉の発展を促す」として、1991年女性による高齢化社会シンポジウムが、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

シンポジウムは、東京地方の福祉行政の次期高齢化問題に取り組み、女性議員の熱意不足が指摘された。東京府千代田区議は「女性議員の積極的な発言が相次いだ」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

男性に任せられない

ホームヘルパーの待遇改善を

「ホームヘルパーの待遇改善を」として、1991年女性による高齢化社会シンポジウムが、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

「ホームヘルパーの待遇改善を」として、1991年女性による高齢化社会シンポジウムが、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

『毎日新聞』1991・9・5 朝刊より転載

老いの青い鳥を求めて

十回目の「女性による高齢化社会シンポジウム」が東京の国立教育会館で、千五百人を集める人々を集めて開かれた。「男性の多くは、国家財政をどうするか、経済政策をどうするかは考えなくても、奥さんが働いたら明日の食費をどうするかは考えない。自分の働きが働いた時のことを考えない」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

「女性による高齢化社会シンポジウム」が、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

「女性による高齢化社会シンポジウム」が、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

「女性による高齢化社会シンポジウム」が、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

「女性による高齢化社会シンポジウム」が、東京都千代田区有明の明門ホールで行われた。このシンポジウムは男性定年制をめぐって「女性の力で差別行政を打破しよう」として、女性議員の積極的な発言が相次いだ。

『毎日新聞』1991・9・4 朝刊より転載

高齢化社会の よりよい住まいづくり のために



古瀬 敏
(建築研究家)

高齢化社会を迎えるにあたり、われわれにとつてなにもがもつとも重要だろうか。

それは、(手前味噌で申し訳ないが)住宅の安全性と使いやすさではないだろうか。なぜなら、望む限りそれまでの住まいに住み続けられることが重要であり、それを保障するものは何はともあれ良質な環境としての住宅だからである。

これまでは、住宅の物理的な要件があまりにも軽視されてきており、年をとってほんとうに不都合が生じて、初めて住宅の問題がクローズアップされてきた。

しかし、実はそのときに気づいても遅いことが多い。第一に、住宅を改造する経済的余力が残っていないこと(新築の

時点では、ほんの少し資金配分を変えさえすれば、将来に備えるのは容易である)、第二に、住宅自体が改造に耐えない貧弱なものであることなどからである。

特に、第二の点は、住宅の寿命をせいぜい三十年程度と見て消耗品扱いしていることと、住宅を単に見栄えするもの、現在の夢をかなえるものとしてのみ考え、世代を経て住み続けていく場としての意味を、全くと言つていいほど考慮していないことに由来しよう。

しばらく前、ある若手建築家が「(住宅論)を展開し、清里ペンション風など十種類に分類してみせ、見栄えが先行してつくられる状況を指摘したものだ」。

この傾向は今も続いている。

しかし、その住宅の「夢」をリードしているのは、比較的若い女性(主婦)だといつて差し支えなからう。男性(夫)は、住宅の中に自らの居場所をつくることにさえ確信が持てないでいる。これは、女性が自らの将来を考えて住宅の中身を左右できるということでもある。

ただ、人は、間近のことしか見えないものらしい。ほぼ確実な未来である(両親、つれあい、そして自身の)高齢化を、自らのこととして考えることは、若い世代にはむずかしいようである。この課題を克服してのみ、高齢化社会がよりよく、住まいやすくなるのではなからうか。



山林知左子様へ

ご寄付の御礼

当会の創立以来細やかな心配りで会を支えて下さる山林知左子さんから、また第十回シンポジウムの資金に二〇万円のご寄付をいただきました。昨年亡くなられた御母堂（故小泉千代子様）が、生前当会の活動に深く心をお寄せ下さったことから、一周忌のご法要を期して、「故人の遺志」としてご寄贈下さったものです。第二回神戸でのシンポジウムの節は、地元の責任者の一人である山林さんを陰に陽に支えて下さったお母様とうかがっています。

今回のシンポジウムは、全く共催団体なしの当会のみの子算での自主行事でした。それだけに、このご寄付は大へんありがたく、心強く存じました。こうしたご厚意に包まれながら活動できる幸せを感謝しつつ、あらためてご母堂の御冥福をお祈り申し上げます。

樋口恵子

「われら有料老人ホーム探険隊」

樋口恵子編

（垂紀書房 一、七〇〇円）

「終いのすみか」の選択肢の一つとして、有料老人ホームのこともっと知りたいたいという素朴な願いで発足したのが有料老人ホーム研究会です。一九八六年三月、会報の呼びかけで集まったのは約三〇名、以来専門家を招いての勉強会やホームの見学、調査やシンポジウムなどを行ってきました。

この本は、まったく未知の世界に入る探険隊のように「入る立場」に立って、見たり聞いたり、タメ息をついたりしながら体験したものをまとめたメンバーの合作です。

第一章・有料老人ホーム—現在の見取り図と道案内、ここを読めば現時点での現状がよくわかります。次に入居までにしておくことやここが不安Q&Aと続き、第四章では入居者六人の体験談。第五章の座談会「有料老人ホームの現状と課題」では現在の問題点が鋭く衝かれ、第七章資料編には介護状況などがひと目でわかるホーム—一覧リストがあります。ガイドブックとしてだけでなく、今後の「終いのすみか」のあり方を考えるきっかけになれば幸いです。

（芹沢茂登子記）

● 只今、当会事務局・書店で販売中 ●

事務局だより

◆虎ノ門ホールの一五二四の座席を女性達の熱気とパワーが埋め尽くし、感動と笑いの渦の中に第十回シンポジウムの幕が降ろされました。北は北海道から南は沖繩まで、この日のためにはるばる駆けつけて下さった会員の皆様、ほんとうにありがとうございます。今回は十回記念ということで趣向を凝らしましたので、会員の皆様にご発言いただく時間が取れず申し訳ございませんでした。

来年は仙台です。初めての「みちのくシンポ」で皆様のお声を聞かせていただくことを今から楽しみにしております。

◆受付に、本の販売に、接待に、ボランティアの方に大きなお力を借りました。カンパをお寄せ下さった方もありました。心より御礼申し上げます。

◆「われら有料老人ホーム探険隊」事務局にも若干ございますのでお申し込み下さい。（会員割引価格千五百円・送料二六〇円）

◆オープンハウスは十月二十八日、十一月二十五日です。（長藤葉子）